





浜通りに届ける復興の風プロジェクト



東大先端研 × 福島高専

「復興知」事業

未来を支える産業人材育成事業

子供たちの明るい未来に向けて

代 表 挨 拶

「『復興する』ってなんでしょうね。」この「復興知」事業を行う上で常に自分の中で、そしてプロジェクトに関わる皆さんに投げかけてきた言葉です。読者の皆さんは、どのようにお考えですか?

今回、プロジェクト終期の節目として、これまで我々が取り組んできた活動を見つめなおし、関わってくださった多くの皆さんへの感謝の気持ちも込めて冊子としてまとめることになりました。改めて、復興活動の難しさと非常に多くの地域の皆さんに関わっていただき、創り上げてきた人とのつながり、活動の拡がりや復興として成しえたこと・成しえなかったことを再認識しました。

震災によって失ってしまったものは甚大で、かつかけがえのないものでありました。それらを取り戻すことの難しさはこの事業活動においても痛感しています。それらへの想いは残しつつも、浜通り地域としての強さを再獲得していくことが、復興に向けた一つの道を整えていくことにつながると確信しています。

『復興する』に対する答えは、まだ持ち合わせていませんが、少なくとも後の世代に不自由を遺さず、むしろこの浜通り地域の希望に満ち溢れる未来を創り上げ、届けることを常に考え活動を進めてきました。そのために、今を生きる浜通り地域の皆さんと共に創り上げる活力ある持続可能な地域社会と、福島高専をはじめとする地域学術教育機関と共に後世へとつなげる教育研究環境構築が重要なピースになると考えています。

本冊子を通じて我々の想いを感じ取っていただくとともに、浜通り地域の未来を創り上げる活動を共にしていただける方々とつながることができましたら幸いです。

『復興する』、『希望に満ち溢れる未来を創る』…その方法論確立の一助になれば幸いです。

東京大学先端科学技術研究センター
飯田　誠

Investment in the future

目　次

第1章　事業の背景と「復興知」事業の概要

■1-1　浜通り地域の現状と課題 4
■1-2　福島イノベーション・コースト構想 4
■1-3　「復興知」事業 4
■1-4　事業の3本柱（人材育成／新しい働き方／交流人口の拡大） 5

第2章　「復興知」事業の全体像（事業の展開と関係組織）

■2-1　事業スキームと年度計画 6
■2-2　産学官連携体制（関係組織図） 7

第3章　主要取組Ⅰ：カーボンニュートラル人材の育成

■3-1　概要 8
■3-2　風力インターンシップ 8
関係者インタビュー［株式会社北拓 伊藤嘉隆様］ 9
■3-3　再エネ関連企業・施設等の見学ツアー 10
■3-4　風力発電に関する講義 11
■3-5　いわきアカデミアとの連携事業 11
■3-6　小学生向け出前授業 12
■3-7　風力分野の研究交流・国際会議での発表 13

第4章　主要取組Ⅱ：新しい働き方の創出 ―超短時間雇用モデル―

■4-1　「超短時間雇用モデル」とは 14
関係者インタビュー
［Hanaセンター事務局（株式会社アカデミー） 古俣哲也様・鈴木寛子様
農業生産法人あかい菜園株式会社 船生典文様］ 15

第5章　主要取組Ⅲ：交流人口拡大と地域活性化

■5-1　概要 16
■5-2　七夕まつりでの実証（ストリートファニチャーによる賑わい創出） 16
関係者インタビュー
［いわき七夕まつり実行委員会 幹事長 鈴木大介様］ 16
［NPO法人タイラボ 代表 北林由布子様］ 16
■5-3　いわき花火大会での人流計測の実証 18
関係者インタビュー
［いわき花火大会実行委員会 山内朋之様］ 19

第6章　東大先端研と福島高専との連携協定の締結 20

第7章　今後の取組み ―次のステージに向けて―

■7-1　風力発電メンテナンス技士認証制度 22
■7-2　（新）風車メンテナンス業務の体験型インターンシップ 23

資料編

■年表（2011～2025） 24

第1章 事業の背景と「復興知」事業の概要



1-1 浜通り地域の現状と課題

浜通り地域は、2011年の東日本大震災と原子力災害をきっかけに、人口構成や産業構造、地域コミュニティに大きな変化が生じました。人口減少や高齢化の進行、働き手や担い手の不足、地域産業の再構築といった課題は、ひとつひとつが単独で存在しているのではなく、複雑に絡み合っています。

浜通り地域には、再生可能エネルギー関連の産業拠点が広がり、風力や太陽光を中心に、大規模な設備が集積しつつあります。一方で、こうした設備の運用・保守には専門性を持つ技術者が求められるものの、その人材育成が地域内で追いついていない状況があります。

また、育児や疾病、介護など、さまざまな理由で長時間勤務が難しい人の働く機会が十分に確保されていないことも課題の一つです。誰もが働きやすい仕組みを整えることは、地域経済の活力維持にも直結します。

さらに、市街地ではイベントの担い手不足や、若年層の関わりの減少が影響し、まち全体の活気をどう維持するかが大きなテーマになっています。これらの課題は、産業、働き方、都市の3つの側面にまたがっており、総合的な対策が求められています。

1-2 福島イノベーション・コースト構想

こうした状況を踏まえ、2014年以降、国と福島県は、浜通り地域を中心に、産業・技術・人材育成を一体的に進める「福島イノベーション・コースト構想（通称：イノベ構想）」を推進してきました。

この構想では、ロボット・再生可能エネルギー・廃炉など、次世代の産業を育てると同時に、それを担う人材を地域で育成することが重要な柱とされています。

単に施設や技術を導入するだけではなく、地域に根ざした人材が育ち、産業として自立していくこと。それが、イノベ構想の目指す姿です。復興を「過去からの回復」としてではなく、「未来への投資」として捉える考え方が、この構想の根底にあります。

イノベ構想とは？

2011年の東日本大震災および原子力災害によって失われた浜通り地域等の産業回復のために、新たな産業基盤の構築を目指す国家プロジェクトです。

イノベ構想6つの重点分野



1-3 「復興知」事業

「復興知」事業は、こうしたイノベ構想の流れの中で、地域の現場と向き合いながら進められてきた事業です。



「復興知」事業とは？

東日本大震災や原子力災害からの復興を実現するため、大学や高専が持つ知識・技術を活用し、地域の未来を担う子どもたちの人材育成や地域貢献を行う取組みです。東京大学先端科学技術研究センター（以降：東大先端研）と、福島工業高等専門学校（以降：福島高専）は、この枠組みを使い、いわき市をはじめとする浜通り地域の未来に向けた、様々な取組みを行っています。

1-4 事業の3本柱（人材育成／新しい働き方／交流人口の拡大）

東大先端研と福島高専が共同で取り組んできた「復興知」事業では、地域の現状と課題を踏まえ、「カーボンニュートラル人材育成・新たな労働環境の形成・交流人口の拡大（地域活性化）」の3つを柱として、様々な取組みを実践してきました。

3本の柱

カーボンニュートラル社会を支える人材育成

再生可能エネルギー分野の技術者を育てるため、風力発電に関するインターンシップや企業見学、VR技術を活用した講義、公民館での小学生向けの出前授業を実施してきました。次世代を担う若者が、地域産業に関心を持ち、将来のキャリアを描くきっかけを提供しています。



誰もが働ける仕組み「超短時間雇用モデル」

障がいや育児などの理由により、長時間働くことが困難な人が、短い時間でも働くことができる仕組みです。働きたい人と企業とのマッチングを行い、働きたい人と職場の双方にとって無理のない働き方を実現する社会モデルが、いわき市内で導入されています。



交流人口の拡大（地域活性化）

いわき市内の七夕まつりや花火大会など、人々が集うイベントにおいて、学生の参加や人流データを活用した安全管理の仕組みづくりなどを進めてきました。まちに人が集まり、世代を超えてつながりが生まれる場づくりを支えています。



これら3つの取組みは、別々に見えるようでいて、実は「地域の基盤を支える人材を育てる」という共通の目的を持っています。相互に関連し合うことで、地域全体の力を底上げする構造をつくっています。

福島風力産業創出戦略 CENTER for Wind Energy

事業目的

風力メンテナンス産業を柱に、地域の技術力・人材力を高めながら風力関連の産業集積を形成し、原子力災害を受けた**浜通り地域において再生可能エネルギーの取組みを通した復興・創生を実現**するとともに、**イノベ構想の推進**に寄与させます。

事業スキーム

推進体制の確立
- 中核的企業誘致
- 教育機関、研究機関との連携による事業推進
- 地域共生モデルの構築
- 域内企業の連携体制構築

STEP 1 / STEP 2 / STEP 3

メンテナンス産業の育成
- 技術高度化
- 人材育成

産業集積・総合拠点化
- 地域内企業の参入促進
- 拠点形成

持続可能な新産業創出

2018年3月連携協定の締結

東大先端研といわき市は、いわき地域はもとより、福島県浜通り地域における活力ある個性豊かな地域形成に寄与することを目的として、2018年3月20日に包括的連携協定を締結しました。



第2章 「復興知」事業の全体像（事業の展開と関係組織）

「復興知」事業は、単年度で成果を求める事業ではありません。地域と向き合いながら、試行錯誤を重ね、「地域の未来を、地域の人と一緒に考えていく」ことを大切にしてきました。課題を外から解決するのではなく、現場に入り、声を聞き、小さな実践を積み重ねていく。その過程そのものを、学びと変化につなげる取組みです。

2-1 事業スキームと年度計画

「復興知」事業は、地域課題の解決を「産学官の協働」で進めることを基本とし、東大先端研、福島高専、いわき市、そして地域の企業・団体が連携して取り組んできました。本事業の特徴は、大学や高専が計画の骨格を示すとともに教育・研究の知見を提供し、行政や地域企業等が実践の場をつくりプログラムを支えるという、役割分担が明確な点にあります。

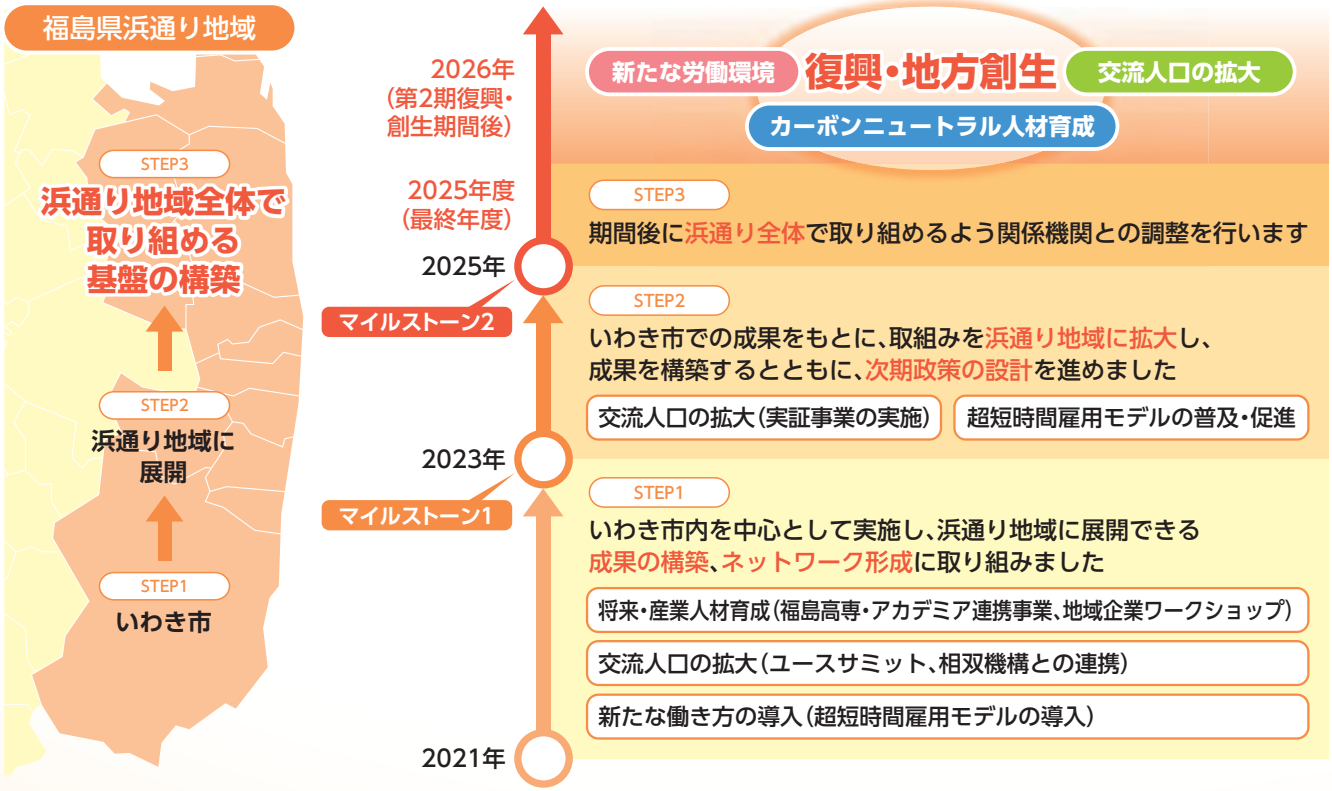
事業全体は、大きく「計画 → 実施 → 検証 → 改善」のサイクルで進められており、各年度のテーマに合わせて重点項目を設定しながら、5年間を通して発展的に取組みを継続してきました。具体的には、人材育成プログラムの拡充、超短時間雇用モデルの制度化、まちなか活性化の実証など、年度ごとに進化する形で取組みが積み上げられています。

各年度では、以下のように段階的に事業を発展させてきました。

基盤形成期（初期）
連携体制の構築、プログラムの試行、インターン受入企業の確保など、事業の土台づくりに重点を置いた期間です。

発展期（中期）
風力インターン、教育DX、超短時間雇用、七夕・花火大会支援など、各取組みが拡大し、地域との関わりが深まった時期です。

成果統合期（直近年度）
取組みを体系的に整理し、成果データを収集・分析し、次年度以降の展望につなげるフェーズとして位置づけられました。



マイルストーン1
- 地域の復興の実情に応じたワークショップを各地域で３回程度実施し、地域の課題を洗い出します。
- 超短時間雇用制度をはじめとした新しい取組みが地域課題解決に寄与します。
- 浜通り地域での本格運用に向けて、地域内の関係機関との連携体制を築きます。

マイルストーン2
- 様々な取組みの中で見えてきた地域課題の解決に貢献していることを再確認し、イノベ構想実現への寄与に対する評価を実施します。
- 福島高専や相双機構等をはじめとする地域の関係協力機関とともに継続的な運営体制の構築を図ります。

2-2 産学官連携体制（関係組織図）

本事業は、東大先端研・福島高専・いわき市の連携を軸に、教育機関、企業、地域団体など、多様な主体が関わる体制で進められてきました。それぞれが持つ強みを生かしながら、役割を分担し、必要に応じて連携の輪を広げていく。その柔軟な体制が、取組みの継続性を支えています。

いわき市連携「未来を支える産業人材育成事業」関係組織イメージ図



東大先端研：専門性と研究的視点の提供

風力インターンや教育DX、人流計測など、研究・教育の知見を活かしたプログラムを設計・実施しています。また、客観的な評価やデータ分析を通じて、事業の成果を可視化し、地域政策への示唆を整理する役割も担っています。

福島高専：教育と実践をつなぐ役割

学生を対象とした講義・実習の場の提供や、出前授業の企画など、教育現場と地域をつなぐ役割を果たしてきました。若い世代への学びの機会づくりを通じ、将来の地域人材育成にも大きく貢献しています。

いわき市：地域企業・団体とのパイプ役

主に地域企業や地域団体との調整を担い、取組みが継続的に進むよう、東大先端研と福島高専の活動を支えています。市内の企業・団体とのネットワークを活かし、実践の場づくりや協働の調整を行う役割を中心に担いました。

地域企業・団体：実践の現場を担うパートナー

インターンシップの受け入れ、超短時間雇用モデルの導入、地域イベントでの実証協力など、事業の実践の場として重要な役割を担っています。現場からのフィードバックは、プログラム改善に大きく作用し、産学官連携の価値を高めています。

地域のステークホルダー

地域行事やまちなかでの活動では、多くの地域住民や学生の積極的な参加があり、事業の広がりや持続性に大きく寄与しました。世代を超えた協働の場が生まれ、地域コミュニティのさらなる活性化にもつながっています。

第3章 主要取組Ⅰ：カーボンニュートラル人材の育成

3-1 概要

近年、再エネ政策や脱炭素社会の実現に向けた取組みが進む中、再エネに対する社会的な関心と期待はますます高まっています。こうした流れを受け、私たちは地域の未来を担う人材育成に注力します。具体的には、風力発電をはじめとする再生可能エネルギーやカーボンニュートラルに関する知識を、地域の子どもたちが学べる機会を創出し、次世代の再エネ産業の担い手を育てることを目指します。この取組みにより、地域社会全体で持続可能なエネルギー利用への理解を深め、未来に向けた力強い一歩を踏み出します。

3-2 風力インターンシップ

風力を始めとする再生可能エネルギー全般への興味関心を高めてもらうこと等を目的として、福島高専4年生の学生を対象に、風車実機を用いた体験型インターンシッププログラムを実施しました。

普段触れることのできない風車実機を用いたプログラムを実施することに加え、風力発電産業の最前線で働く技術者と接する機会を設けることで、将来の福島県内の風力産業を支える人材の育成に取り組んでいます。

これまでの実績としては、平成30年～令和6年度の累計で約60名の学生がインターンシップに参加しており、インターンシップ実施後のアンケート調査によると、これまでの参加学生のほとんどが、風力発電をはじめとした再エネ関連分野への就職に興味関心を示すようになっています。


▲風力発電O&M等に関する座学


▲増速機点検


▲CTVからの乗り移り訓練
CTV（Crew Transfer Vessel）：洋上風力発電の維持管理等を行う作業員を安全に輸送するための専用船


▲ブレード点検


▲FRP（繊維強化プラスチック）の塗装


▲フルハーネス型安全帯特別教育


▲風車実機を用いた体験


▲集合写真

風力インターンシップに参加した学生の声



風力発電は設備を見るだけだと思っていましたが、実際には多くの人や技術が関わっていることを知りました。



教科書で学んだ内容が、現場ではどのように使われているのかを初めて具体的にイメージできました。



電気系、機械系に限らず、化学系、都市システム系などの学生も「自分には関係ない分野」から「自分も関われる分野」へと意識が転換したことも確認でき、風力発電や再生可能エネルギー分野を就職先の選択肢や進学・研究テーマとして関心を持ったとする声が多く聞かれたよ!



自分の専門分野でも、再生可能エネルギーに関われる可能性があると感じました。



将来、再エネ分野や地域に関わる仕事も選択肢として考えてみたいと思いました。

このインターンシップは、単なる見学ではなく再生可能エネルギーを「知識」から「実感」へと転換し、学生の専門性と社会課題を結びつける機会となる、教育的効果の高いプログラムといえるね!





ところで…

僕の名前は「せんタン」です!

東大先端研の公認キャラクター。特徴はユニコーン(馬では無い)。他の地域のマスコットとの交流を目指しています。特技は角発射(何かひらめいたとき)と身体拡張(ペガサスにもなる)と蹄によるキーボード入力。口癖は「それは先端だね」。好物は日本茶。



関係者インタビュー　株式会社北拓　伊藤　嘉隆 様



弊社では、2019年より東大先端研様、いわき市様と共に本格的にインターンシッププログラムを実施して参りました。多くの生徒たちが遠く北九州にて風力発電のO&M(オペレーション&メンテナンス)について実作業を通して学んで頂きました。

実際にインターンシップに参加する生徒達と触れ合う中で一番感じたことは、再エネに対する意識が高いということでした。そのため実習中もとても真摯に取り組んで頂いたと感じています。数名の生徒たちが弊社にも就職して活躍してくれています。

【プロフィール】
・2004年4月～2019年6月
北九州市役所
・2019年9月 株式会社北拓 入社
(総務部、NEDO担当、JWPA広報・人材育成担当、北九州洋上風力発電担当など)
・2025年10月
ひびきウインドエナジー株式会社 取締役

そのような意識を持った生徒たちが、いわき市から全国の風車のメンテナンスに関わる事ができるよう今後も東大先端研様、いわき市様と協同していきたいと考えております。

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 専攻科 産業技術システム工学専攻2年　水竹　巧(みずたけ　こう)

私は、ものづくりや発電産業に興味があったことから、本インターンシップへの参加を決めました。特に印象に残っているのは、実際にフルハーネスを着用し、実機を用いて行った定期点検の体験です。夏場の風車内での作業は非常に過酷でしたが、現場で働く方々の大変さや責任の重さを実感し、共感することができました。本インターンシップを通して、技術や知識だけでなく、社会人としての考え方も学ぶことができ、この経験を将来技術者として生かしていきたいと考えています。

3-3 再エネ関連企業・施設等の見学ツアー

福島高専の電気電子システム工学科3年生の学生を対象に、風力をはじめとする再生可能エネルギー関連の企業や電力関連施設を見学するバスツアーを実施しました。

風力発電を推進する地域企業や、県内で稼働している陸上風車の見学を行うことで、福島における風力発電のポテンシャルの高さを理解してもらうとともに、地域で進む復興に向けた取組みに対し、学生が興味関心を抱くきっかけを創出することを目的としており、毎年40名程度の学生が参加しています。

特に令和6年度からは、「東北電力ネットワーク株式会社 総合研修センター」を訪問しており、送電・変電・配電等における実際の作業の様子を実演していただくなど、電気系を専攻している学生にとって、非常に深みのある見学ツアーとなりました。

視察企業の技術者の方々から、風車のメンテナンスや電力産業に関する具体的な業務内容等を直接聞くことにより、現在学んでいる電気電子工学と延長線上にある社会との接点を意識させることも目的の一つとなっています。

株式会社北拓（福島支店）


▲企業の概要を学ぶ座学


▲風車ブレードの説明


▲組立て前の風車部品の見学


▲屋内トレーニング施設の見学

東北電力ネットワーク株式会社


▲配電設備の見学


▲変電設備の操作体験


▲送電設備の点検作業


▲給電設備の操作体験

万葉の里風力発電所


▲陸上風車の概要説明


▲風車内部の見学

福島ロボットテストフィールド


▲ロボテスの概要説明


▲記念撮影

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 電気電子システム工学科５年　雪下　優菜（ゆきした　ゆうな）

私は二年前、「復興知」事業の一環である再エネ関連企業・施設見学に参加いたしました。安全訓練施設や実機を見学させていただく中、特に印象に残ったのはブレードの見学です。初めて間近で見たブレードは想像より大きく、この巨大な構造物を空高くで安全に制御しているという点に驚きました。軽量化の努力やメンテナンスの方法など、職員の方のお話も興味深く、この見学は私が風力発電に興味を持つにあたって大変貴重な経験となりました。

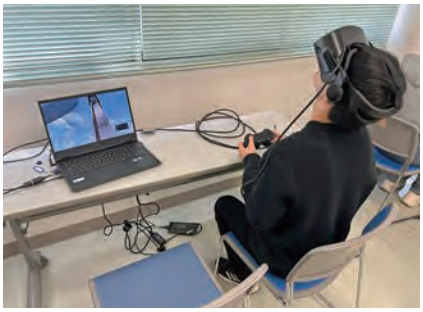
3-4 風力発電に関する講義

福島高専専攻科の産業技術システム工学専攻1年生の学生を対象に、東大先端研の飯田特任准教授による風力発電に関する講義を実施しました。

「風車の基本原理・風力発電事業の概要」や「国内における洋上風力発電の概況」といった基礎的な内容に加えて、風力発電設備を運用するための「スマートメンテナンス技術」や「ブレードの雷トラブル対策技術」など、風力発電に関する専門的な内容の講義を実施しました。

なお、風車の建設や維持管理には、「電気電子」や「機械設備」の知識が必要になるのはもちろんのこと、風車の基礎工事等には「土木」の知識、ブレードの補修等には「化学」の知識が必要になるなど、福島高専の全ての分野の学生が、将来的に風力産業に携われることを実感できる講義となっています。


▲風力発電講義の様子


▲風車のVR体験


▲VR映像（洋上風車ver）

3-5 いわきアカデミアとの連携事業

いわきアカデミアと連携して、市内の小学校、中学校、高校へのアウトリーチ教育を実施しました。

磐城桜が丘高校2年生の「総合的な探求の時間」を活用し、一般的なSDGsの考え方に加え、再生可能エネルギーや都市工学におけるまちづくりの分野など、東大先端研の研究者が専門的な知見から講義・ワークショップを実施しました。

飯田特任准教授　講義

- SDGs全般
- 再生可能エネルギー・風力発電




近藤准教授　講義

- 建築・都市計画、施設マネジメント
- 持続可能な参加型まちづくり




COMMENT FROM STUDENT



福島高専 専攻科 産業技術システム工学専攻１年　**加藤　慎也**（かとう　しんや）

今年度、専攻科１年向けの風力発電に関する講義を受講しました。カーボンニュートラル宣言に関する説明を通じて、再生可能エネルギーの導入のみならず、輸送の電動化や省エネ、CO_2の回収など様々なアプローチがあり、広い視野で最先端を捉える重要性を実感しました。

また、風力発電に関する説明では、洋上風力発電の景観がテクノスケープとして良い印象を与え、経済効果を発生させているモデルケースや、画像処理によるバードストライク防止の研究開発など、課題解決に向けて日々取り組まれている点が特に印象的でした。

3-6 小学生向け出前授業

公民館との連携（土曜学習推進事業の活用）により、地域の小学生を対象とした再生可能エネルギーの教育活動の場として、福島高専の学生による出前講義や体験学習を実施しました。

低学年向けには身近な日常生活のエネルギーを知るための「すごろく」や「輪投げ」を行う一方で、高学年向けには「LEGOブロックで作るソーラーカー」や「坂登り水車」の製作・仕組み解説を行うなど、学年ごとに応じた体験学習を実施しており、小学生でも分かりやすい内容となるように工夫しています。

なお、福島高専の学生が自分たちの手で、再エネを学ぶことができる様々な道具を製作しており、参加した小学生が再エネについて分かりやすく学べるだけでなく、高専生自身の学びの場にもなっています。









低学年：再エネを知る遊び


▲すごろく


▲輪投げ

中学年：再エネのゲーム体験


▲ゲームの遊び方説明


▲ゲーム体験

高学年：LEGOブロックで作るソーラーカー製作


▲ソーラーカーの製作


▲デモ走行

高学年：坂登り水車の製作


▲坂登り水車の製作


▲実験の様子

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 専攻科 産業技術システム工学専攻１年　荻津　桜子（おぎつ　さくらこ）

私は「復興知」事業の一環として、小学生向けの出前授業に参加しました。出前授業では、再エネやエネルギー問題についての講義を行い、その後、学年別に体験学習を行います。遊びや工作を取り入れて実際に体験してもらうことで、子どもたちが再エネやエネルギー問題を身近に感じながら楽しく学べる時間になったと思います。専門的な内容でも、伝え方を工夫することで理解や関心が広がることを実感し、技術を社会に生かすためには伝える力も重要だと感じました。

3-7 風力分野の研究交流・国際会議での発表

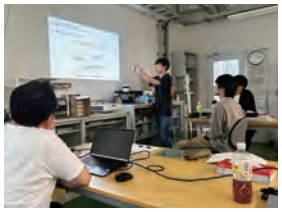
これまで「復興知」事業における様々な活動に携わり、風力をはじめとする再生可能エネルギーに興味を持った福島高専の学生たちが、専攻科に進学後、再エネに関する研究を行っている研究室（橋本研究室）に、自らの希望で配属されています。

このような動きを踏まえ、令和6年度からは、東大先端研の飯田特任准教授と福島高専の橋本研究室の学生を中心とした、風力に関する研究交流・勉強会を実施しており、これまでの「復興知」事業での取組みの中でも、より高度な専門教育を実施しています。

また、本取組みにおいては、国際会議にて、学生が自身の研究の手法や成果に関する学会発表を行っています。

研究交流・勉強会の様子


▲勉強会の様子


▲各研究の進捗発表

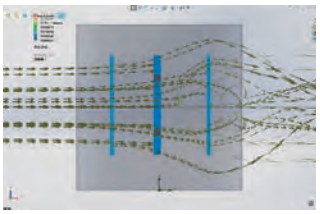
福島ロボットテストフィールド（風洞実験）


▲自作風車の設置


▲風車の特性試験

シミュレーションソフトを使用した実験

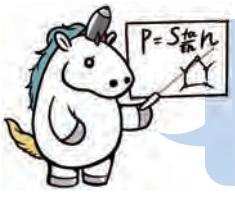

▲風況シミュレーションの様子


▲解析画面


国際学会発表の様子▶



▲学生の論文（国際誌）



月2～3回程度の研究交流・勉強会の中で、福島ロボットテストフィールドの風洞棟を活用した学生自作風車の特性試験の実験や、シミュレーションソフトを使用した風車の出力特性の調査など、学生が自分で設定した研究テーマに基づいた調査・研究を行っているよ!

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 専攻科 産業技術システム工学専攻 2 年 **関内　悠輝**（せきうち　ゆうき）

橋本先生だけでなく飯田先生からも継続的にご指導いただいたことで、研究をさらに深化させることができました。英語論文の作成や国際会議での発表の準備は想像以上に大変でしたが、先生方のお力添えにより納得のいく内容に仕上げることができ、素晴らしい経験になりました。輪読では進め方を工夫し、より効果的な方法を実践することで着実に力をつけることができました。このような環境で研究に取り組めたことに、心から感謝申し上げます。

第4章 主要取組Ⅱ：新しい働き方の創出 ―超短時間雇用モデル―

4-1 「超短時間雇用モデル」とは

人口減少に伴い労働人口が減少する中で、地域内の潜在的な労働力を活用することを目指して、社会包摂システム分野の近藤教授が提唱する「超短時間雇用モデル」をいわき市内で実装しています。

「超短時間雇用モデル」とは、労働意欲はあるものの、障がい等の理由により長時間の労働が難しい人でも、「1日15分、週1回から」労働することができる環境を生み出し、一般企業等で役割を持って働くことを可能とするもので、その知見や手法を地域の人材に移転することにより、社会モデルの地域システム化を図っています。

導入した企業からは高評価のコメントを多くいただいており、いわき市が産業政策として進める再エネ分野での労働力確保においても期待が高まっています。





▲パンフレット



これまでの取組みにより、超短時間雇用モデルのノウハウが地元企業にしっかりと根付いてきているよ!また、継続した企業開拓やワーカー登録により、市内における超短時間雇用モデルの活用事例が着実に増加していて、これまで市内においても計19名（令和7年12月末現在）の雇用実績を生み出しているんだ!

いわき市内企業の導入事例

あかい菜園【トマトの収穫作業】

週に1回、2時間なので生活リズムを崩すことなく働くことができています。人とコミュニケーションを取ることに苦手意識がありますが、収穫作業はひとりで黙々と行うので特にストレスを感じることはありません。



坂本紙店【商品の検品作業】

初めのうちは緊張しましたが、職場の方が親切に教えてくださり、安心して仕事をさせていただいています。検品作業が自分に合っていると感じますし、より多くの検品ができたときは達成感を感じます。





（左から）鈴木寛子様、船生典文様、古俣哲也様

関係者インタビュー

いわき市Hanaセンター（株式会社アカデミー）
古俣　哲也 様　　鈴木　寛子 様

いわき市Hanaセンターは、東大先端研と連携し超短時間雇用の導入から定着までを支援。事務局は株式会社アカデミーが担い、市産業振興部と企業・働きたい人をつなぐ窓口になっている。

農業生産法人 あかい菜園株式会社
船生　典文 様

新卒から主婦、シニア、障がい者まで働くあかい菜園代表。地元雇用を守りながら、スマート農業で高品質なトマトの安定生産を目指す。

■古俣さん

この事業は、働きたい気持ちはあっても長時間が難しい方と、人手不足に悩む企業をつなぐ仕組みです。企業側からは、期待以上に働いてくれているという声が多く寄せられています。それは短時間だからこそ集中でき、成果につながっているからだと思います。最初は短い時間から始め、慣れてきたら少しずつ時間を延ばす。そのステップが、働く自信を育て、次の雇用の形へとつながっていく大切な過程だと考えています。小さな成功体験を積み重ねることが、就労への不安を和らげる大きな力になると感じています。

■船生さん

農業は繁忙期と閑散期の差が大きく、人手の確保が常に課題でした。特に収穫期では、あと少し人がいればという場面は多く、超短時間雇用という仕組みは、その隙間を埋めてくれるので我々のニーズにとてもマッチしていました。実習を通して本人と仕事の相性を確認できたことで、不安なく受け入れることができ、想像以上に戦力になっています。作業は正確で、現場の雰囲気も明るくなりました。無理のない時間設定だからこそ継続でき、季節ごとの作業にも柔軟に対応してもらえています。短い時間でも積み重ねることで自信につながるため、超短時間雇用は、働く側と雇う側の双方にとって無理のない形を実現すると実感しています。

■鈴木さん

私たちは雇用後の定着支援にも力を入れています。企業と働き手、そして福祉事業所と連携しながら、不安や困りごとを早い段階で共有することで、安心して働き続けられる環境を整えています。小さな変化や不安を見逃さず、丁寧に関わることが継続につながります。一人ひとりの状況に合わせて支援を調整することで、無理のない就労を支えています。短時間雇用が当たり前の選択肢として広がり、少しなら働けるという思いが自然に仕事につながる地域になっていけば嬉しいです。

COMMENT FROM PROFESSOR



東大先端研 社会包摂システム分野 教授　近藤　武夫 先生

超短時間雇用モデルの取組みでは、働きたいという思いがありながら十分な機会を得られなかった人と、人手不足に悩む企業や、地域包摂に関わりたいという思いを持つ企業とを結びつける事例等が生まれています。本モデルの目標は、こうした雇用の事例が地域で継続的に創出される仕組みを構築することです。いわき市においても、企業、支援機関、行政が連携しながら、新しい働き方を育んできました。このモデルが根付くことで、誰もが役割を持って地域で活躍することを支える、持続可能な地域システムへと発展することを期待しています。

COMMENT FROM PROFESSOR



東大先端研 社会包摂システム分野 特任助教　松清　あゆみ 先生

2022年度から始まった超短時間雇用事業を通じて、市内企業や支援機関、行政の皆様等、多くの出会いを重ねてきました。「うちで働いてくれて本当に助かっている」という企業の声や、働く経験を通して自信を深めていく方々のお話から、この事業の価値を実感しています。これまで働くことに不安を抱えていた方が人手不足に困っている市内企業を支える。こうした事例がさらに広がり、誰もが自分らしく働けるいわき市になっていくことを期待しています。

第5章 主要取組Ⅲ：交流人口拡大と地域活性化

5-1 概要



「復興知」事業では、人材育成や新しい働き方の導入に加えて、人々が「まち」に集い、そこで生まれる「交流」が、地域にもたらす変化や価値にも着目してきました。

人々がどのように集まり、どこで滞留し、どのように動くのか。イベントや日常の風景を、地域の未来を考えるための「実験の場」として捉えることで、実証を通して、まちの可能性を探ってみました。

5-2 七夕まつりでの実証（ストリートファニチャーによる賑わい創出）

いわき駅前の活性化・賑わい作りに向け、毎年8月6～7日に開催される「いわき七夕まつり」において、ストリートファニチャーの実証事業を実施しており、公共空間利活用の視点から段ボール型のストリートファニチャーを歩道に設置することで、人々の中でどのように対話が生まれるのかを検証しています。

また、地元産業が地域課題の把握力を身に着け、自らの手で課題解決を行う手法を学ぶことにより、地域の産業復興や地域経済の活性化につなげることも目的の一つであり、主に商工会議所を窓口としながら、駅前商店街やいわき七夕まつり実行委員会など、イベントを支える地域の皆さまと継続的な情報交換を実施しています。



「ストリートファニチャー」とは、街路や公園などの屋外公共空間に設置されるベンチやテーブルなどの家具のことだよ!まちを歩く人が、座る・休む・集まるために自由に使えるんだ!



関係者インタビュー

いわき七夕まつり実行委員会 幹事長
鈴木　大介 様



青果店「八百清」を営みながら、七夕まつりなどの地域活動に関わっている。いわきFCの地域連携にも携わり、まちに人が集うきっかけづくりに取り組んでいる。

印象的だったのは、若い世代の反応です。ストリートファニチャーを高校生が写真に撮ってSNSに上げ、それを見た子たちが「ここどこ？」と話していたり、設置された椅子に座って談笑する姿が見られました。人が通り過ぎるだけだった場所に、滞在する風景が生まれたことは大きな変化でした。商店街として売上の課題はありますが、イベントがなくても人が集い過ごせる環境づくりが重要だと感じています。七夕をきっかけに外部との関わりも広がり、今後のまちなかづくりにつながっていくと考えています。

NPO法人 タイラボ 代表
北林　由布子 様



いわき市出身。東京で学生時代を過ごした後、いわき駅前に元気を取り戻そうとUターン。イタリアンやゲストハウスを拠点に、食と人のつながりを大切にしたまちづくりに取り組んでいる。

私たちがこれまで続けてきた、歩道や路上を使って人が立ち止まる場をつくる取組みが、「復興知」事業を通じて行政や研究の視点から裏付けられていくことに、大きな手応えを感じました。人が立ち止まり、自然と会話が生まれる風景は、いわきのまちが本来持っていた姿だと思います。これからも日常の中に偶然の出会いが生まれる場所を育て、若い世代が関わり続けたくなるいわきを、地域の人とともにつくっていきたいです。

ストリートファニチャー実証 in いわき七夕まつり

●段ボールファニチャー●

いわき駅前で開催された「いわき七夕まつり」の中、七夕飾りの下には、段ボールで作られたファニチャー（家具）が並びました。これは置き方によって、テーブルやイスとして使うことができる「街の家具」です。人々が集まる場所に「ちょっと休める場所」があるだけで、地域住民に会話が生まれ、人々に「つながり」が生まれます。



福島高専の学生も参加

2025年度からは福島高専の学生も活動に参加。「試しに座ってみませんか?」学生たちの声かけで、親子やお年寄り、観光客など多くの人々が座り「これ段ボールなの?すごく面白いね!」「また来年もやってください!」と楽しむ声をいただきました。



アロハシャツのデザインづくり!

参加者に折り紙とノリを渡して、段ボールファニチャーに貼り付けてもらうことでデザインを作成!



❶来場者にイベント内容を説明 → ❷折り紙を段ボールに貼り付けてもらう → ❸仕上げ作業 → ❹貼り付け完了 → ❺段ボールを広げて服の形に → ❻画像処理で2次元データに変換 → ❼生成AIでシャツのデザインを作成



＼イベント関係者が集まって実証の結果を話し合ったよ!／

「人が集まること」そのものを目的にするのではなく、どのように集まり、どのように過ごしてもらうか、こうした考え方は、今後のイベント運営や、日常のまちづくりにも生かされていくことが期待され、そしてその積み重ねが、持続的な地域活性につながるんだね！



COMMENT FROM PROFESSOR



東大先端研 地域社会システム工学分野 准教授 **近藤　早映** 先生

2023年に開始したストリートファニチャー研究を、いわき市の皆さまと3年間にわたり協働で実施しました。商工会議所や商店主の皆様への成果共有を通じて継続的な対話が生まれ、市民主体でストリートファニチャーの恒常設置へと展開していく過程を見守れたことは、大変貴重な経験でした。現在、駅前通りには笑顔と会話が広がり、居心地のよい公共空間が育まれていることを実感しています。微力ながらその一助となれたことは、私たちにとってこの上ない喜びです。

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 電気電子システム工学科５年 **根田　光**（こんだ　ひかる）

今回のいわき七夕まつりで行われたストリートファニチャーの実証に参加し、いわき市のイメージカラーが太陽と海を象徴する「赤と青」であることを初めて知りました。来場者への声掛けや、装飾を施した段ボールの設置方法など、細部にまで工夫を凝らしたことで、祭りを楽しむ人々との自然な交流が生まれました。この経験を通して、いわき市をより身近に、そして鮮明に感じることができ、地域に貢献できたことを実感することが出来ました。

5-3 いわき花火大会での人流計測の実証

市内イベントにおける混雑緩和策の提案に向けて、いわき花火大会で人流計測の実証実験を行っています。

本実証では、いわき花火大会を支える実行委員会の方々と意見交換を重ねながら取組みを進めており、得られた具体的なノウハウや知見を地域に共有しています。こうした知識の移転を通じて、イベント運営者が自らの力で地域課題に向き合い、改善策を生み出していくための能力向上にも貢献しています。

人の流れと混雑状況を計測 in いわき花火大会

小名浜港を舞台に開催される「いわき花火大会」では、毎年多くの人々が集まりますが、混雑した場所では、転倒事故や犯罪リスクが高まると言われています。そこで、我々はBluetoothセンサを用いて人が多く集まっている場所を特定するほか、安全対策に向けた実証を行っています。



▲Bluetoothセンサの設置



▲計測データの確認



● 2025年度の実証イメージ（Bluetoothセンサを用いた混雑状況の緩和）●

高専生による実験器具の設置















Bluetoothセンサを用いて来場者の混雑状況を計測し、混雑時には仮設照明を自動で点灯させ、花火をあえて見づらくすることで、来場者を非混雑空間へと誘導する実証研究を実施したよ!

COMMENT FROM STUDENT



福島高専 電気電子システム工学科４年　阿部　神奈（あべ　かんな）

花火大会での人流測定は、みんなで協力して測定機器を設置するところから始まり、とても楽しかったです。みんなで声を掛け合ったり、リアルタイムでの測定をしたりしたのが一番印象に残っています。花火を見に来た人に計測機器について質問され、説明しながら会話もできたのも嬉しかったです。作業だけでなく、コミュニケーションの大切さも感じられるいい経験でした。

関係者インタビュー

いわき花火大会実行委員会
山内　朋之 様

2016年頃からいわき花火大会の運営に関わり、設営や警備、広報などを担当。いわき市のまちづくり活動に携わりながら、地域の活性化や小名浜港の魅力向上に取り組んでいる。



東大先端研との協力は、大きな転機になったと感じています。人流計測やドローン撮影によって、これまで感覚的に捉えていた混雑状況や安全面の課題がデータとして可視化され、次の年の運営判断に役立つようになりました。さらに学生たちが参加することで、運営体制が外に開かれていく変化も生まれています。今後は、地域の人がもっと運営にも関われるような、いわき全体のイベントへと広がっていくことを期待しています。

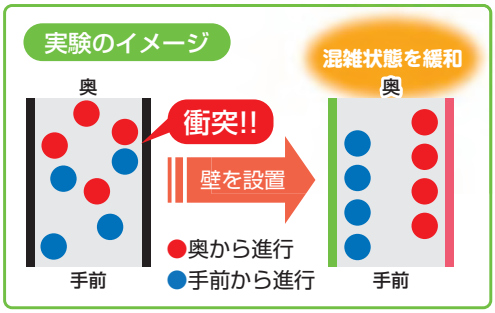
実証研究を踏まえて…

福島高専の文化祭

2色の壁実験 in 磐陽祭

混雑が予想されていた渡り廊下に、赤色と緑色の2色で構成される仮設の壁を設置。

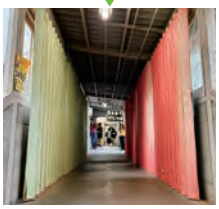
通路の両側（左右）の壁の色を、左右で「赤色」と「緑色」に別々にしてみて、みんながどちら側を通るかを調べてみました。人は「赤色」を見るとちょっとこわいと感じたり、「緑色」を見ると安心することがあると言われています。



壁の構造上、手前と奥どちらから見ても **緑色が左にくる!**


手前から撮影


「2色の壁」はジャバラ状のため見る方向によって色が違う


奥から撮影

COMMENT FROM PROFESSOR



東京大学工学部 工学系研究科　フェリシャーニ　クラウディオ 先生

いわきの皆さんと一緒に仕事ができたことは、私にとって大きな名誉でした。結びつきが強く開かれた地域の雰囲気や、起伏のある地形と海の景色は、私の故郷を思い出させてくれました。いわき市の規模は実験やデータ収集に適しており、花火大会のように多くの人が集まる場でも、柔軟な運営により円滑な意思疎通が可能でした。今後も、仕事・個人の両面でいわきとのつながりを大切にし、福島高専の皆さんや地域の方々と活動を続けていきたいと考えています。

COMMENT FROM PROFESSOR



東京大学工学部 工学系研究科 助教　谷田　桜子 先生

2022年に手探りで始めたいわき市での群集測定は、今年で4年目を迎えました。研究室内での研究では状況が理想化されがちですが、現場に立つことで社会にどう役立てるかを常に意識できる貴重な経験になっています。とくにいわき花火大会は、暗闇に人が集まる状況が自然に生まれ、実験では再現できない理想的な観測の場です。人が集まる前に準備を終える必要があるため、日中の暑い時間に装置設置をするのですが、頑張ったあとに見る花火の感動はひとしおです。

第6章 東大先端研と福島高専との連携協定の締結

「復興知」事業の終期である令和8年3月末以降の活動を見据え、令和7年7月に東大先端研と福島高専との間で、福島復興に資する連携協定を締結しました。

既に2者と連携協定を締結しているいわき市を含めた3者間での産官学連携を深めることで、これまでの活動を継続するとともに、東大先端研と福島高専の教員・学生を交えた他分野での研究交流の実施など、両者の連携による更なる取組みを展開しています。



福島工業高等専門学校 × 東京大学先端科学技術研究センター



**復興の
その先を創る**

福島高専　校長
岡本　任弘 氏



**掛け算で
復興から最先端へ**

東大先端研　所長
杉山　正和 氏

東大先端研との取組みは、今回の協定締結を経て、福島高専のスローガンである「持続可能な社会発展を目指し、グローカルに活躍する次世代技術者を育成する」ことに向けて加速していくものと確信しております。復興・カーボンニュートラルの実現に向けて、このいわきの地から豊かな素養を身に付けた学生が多く生まれることを期待しています。

先端技術と地域の熱い想いを掛け算して課題を解決していくのが先端研の地域共創です。その中心となるのが「ひと」のつながり。

地域の未来を担う人材を輩出する高専と先端研との連携は、地域共創の新たなステージです。復興の先に世界のだれもが羨む地域の創造を目指して、いわき市、福島高専の皆さんと一緒にチャレンジしていきます。



連携協定締結記念シンポジウム

各省庁からのメッセージ



復興庁　統括官付審議官　牛尾　則文 氏

世界の学術的知見が集まる東大と地元に密着した高度な技術者育成を行う福島高専が、それぞれの特徴を生かしながら、継続的な協力関係を築くことで、これまでにない新しい形の復興の取組みを期待します。



文部科学省　大臣官房審議官　橋爪　淳 氏

今回の協定締結に、関係者の皆様の熱意を強く感じます。これを機にいわき市・福島高専・東大先端研の絆がさらに深まり、地元とともに歩む「復興知」事業のモデルケースとして、長きにわたり発展するよう期待しています。



経済産業省　大臣官房福島復興推進グループ付審議官　佐野　究一郎 氏

再エネや賑わい創出など両校の特色ある取組みを通じて、イノベ構想を支える人材育成、地域コミュニティの活性化など、これまで培ってきた先端研といわき市の連携事業が浜通り全体に横展開されていくことを期待しています。

第7章 今後の取組み —次のステージに向けて—

7-1 風力発電メンテナンス技士認証制度

風車の定期自主検査における知識や技術等の力量の見える化を図るため、「国内初・いわき市発」となる風力発電のメンテナンスにおける人材認証制度の運用開始に向けた準備を進めています。

制度構築の目的

定期自主検査（※）を軸とした力量（知識・技術）の見える化のための「要員認証制度」を構築

※定期自主検査とは、電気事業法施行規則で定められた発電設備に関する自主検査であり、その検査記録は定期的に国へ報告し、審査を受ける義務（定期安全管理審査）があります。



風力メンテナンス技量の確保

検査に必要な
知識・技術の習得・評価

地域企業の人材育成

参入に向けた
意欲・力量・自信・与信の獲得



発電所が立地する地元での
メンテナンス対応が可能

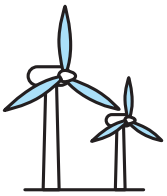
裏付けのある知識・技術力
により参入機会の拡大

保安力・保全力の向上

安全・安心の確保

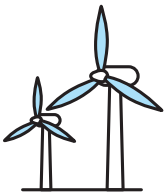
地域企業の参入促進

産業振興・地域経済活性化



風力発電事業の導入拡大に貢献

安全・安心な再生可能エネルギー源の確保



市長からのメッセージ



いわき市長
内田　広之 氏

いわき市は、福島第一原発事故以降、活性化する再エネ導入に伴い、風力発電での新たな産業形成を目指し、東大先端研と連携しながら、企業の技術力向上、学生に対する「再エネ×復興」人財の育成に取り組んできました。

その成果として、全国初となる『風力発電メンテナンス技士認証制度』の構築により、再エネ人財の新たな育成手法が確立されようとしています。

また、東大先端研と福島高専が直接連携し、研究交流等を通じて専門性の高い人財育成に着手しました。

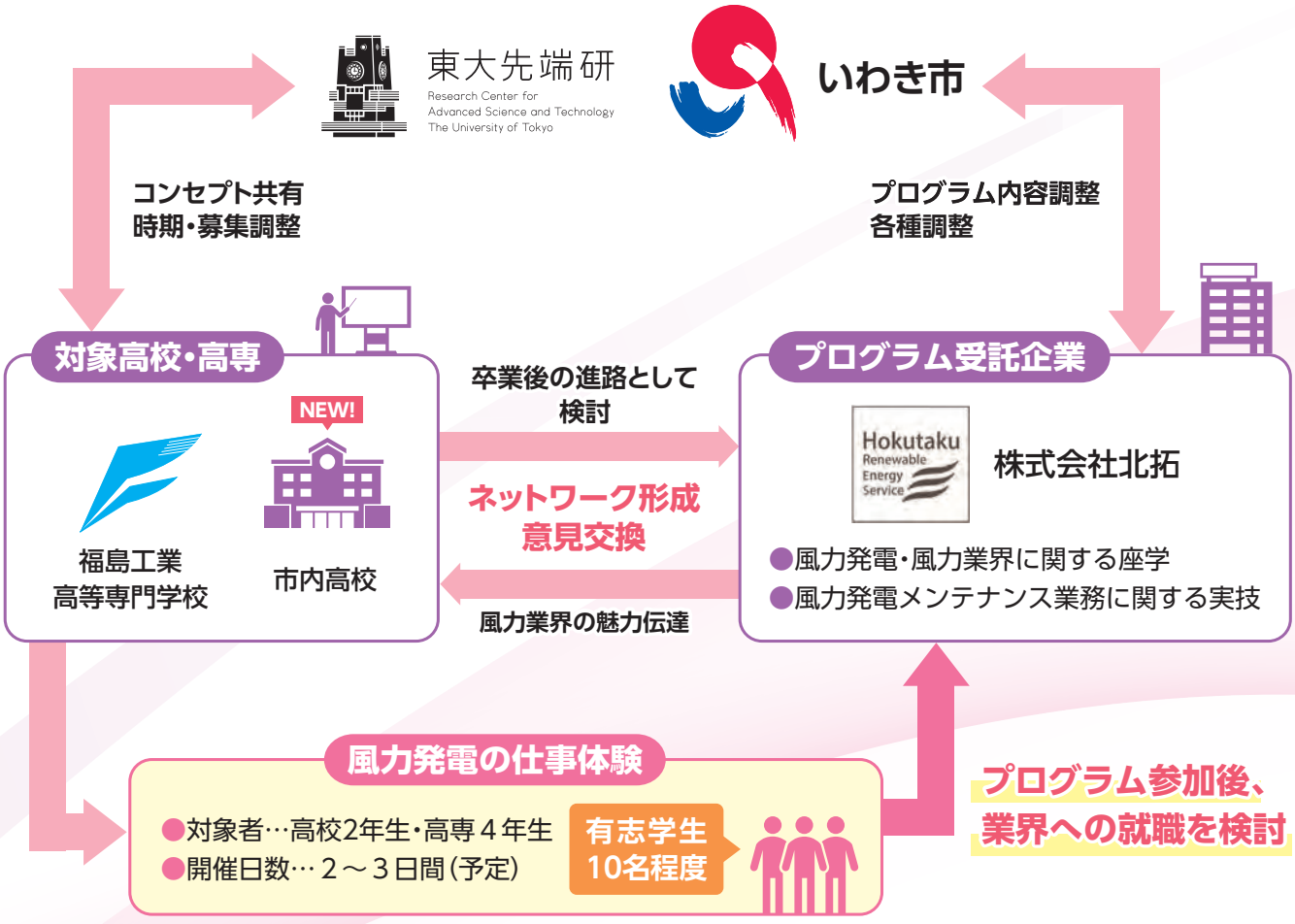
地域の学生や企業人財が「風」という地域資源を新たな価値に変換し、未来を牽引する人財として羽ばたくことを切に願い、引き続き、両校と連携しながら更なる飛躍を目指します。

7-2 （新）風車メンテナンス業務の体験型インターンシップ

これまでは、福島高専4年生の学生を対象に、北九州市内にて風車実機を用いた風力インターンシップを開催しており、人材育成のノウハウや知見を、受け入れ企業である株式会社北拓とともに蓄積してきました。

2024年12月に、株式会社北拓福島支店の敷地内に、トレーニング用の陸上風車が完成し、風力発電に資する地域人材の育成環境が整ったことから、今後は、いわき市を舞台に、福島高専生のみならず、市内の工業高校等の学生も参加可能となる「（新）風車メンテナンス業務の体験型インターンシッププログラム」の実施を予定しています。

この新しい試みにより、今後は今まで以上に、地域の子どもたちが風車メンテナンス等の実業務を体験する機会を創出し、風力業界に進む人材育成の仕組み構築と人材輩出の拡大を図っていきます。また、故障診断、予兆保全、ブレード点検など高度なO&M技術への理解を深めることで、地域における再エネ産業クラスターの形成にも寄与することが期待されます。



東大先端研の多様な分野の研究者と共同研究をしてみませんか?

いわき市では、「産業ブラッシュアップ支援事業（旧：グリーンイノベーション創出支援事業）」により、グリーン成長戦略やイノベ構想に資する技術開発等を目的とした、いわき市内企業と先端研研究者との共同研究を支援しているよ!



お問い合わせ **公益社団法人 いわき産学官ネットワーク協会**
〒970-8026
いわき市平字田町120番地 LATOV6F いわき産業創造館内
TEL：0246-21-7570 FAX：0246-21-7571

ホームページ　facebook

資料編　年表(2011～2025)

令和5年度からは福島高専も共同申請校となり、風力インターンシップや小学生向けの出前講座など、様々な取組みを一体となって実施してきましたが、「復興知」事業は2025年度(令和7年度)末で終了予定とされています。

今後は、これまでの活動で見えてきた課題や今後の取組みの方向性について整理を行い、2026年度(令和8年度)以降の活動につなげていくことで、我々が目標としている「福島の復興」を一歩づつ前に進めていきます。

2011年　東日本大震災・原子力災害の発生

東日本大震災および福島第一原子力発電所事故により、福島県浜通り地域は大きな被害を受け、長期にわたる復興への歩みが始まる。

2014年　福島イノベーション・コースト構想の始動

浜通り地域を中心に、産業再生と人材育成を一体的に進める福島イノベーション・コースト構想が打ち出される。復興を「未来づくり」につなげる方向性が示される。



▲連携協定締結式

2018年　東大先端研といわき市が包括的連携協定を締結

大学の知見と地域の課題を結びつけ、人材育成や実証的な取組みを進める枠組みが整う。「復興知」事業の基盤となる連携がスタート。

復興知第1期


▲風力インターンシップ

2019年　風力人材育成プログラムの拡充

風力発電に関する講義やインターンシッププログラムなどを実施したことにより、地域の学生が再エネについて学ぶ機会が広がる。


▲地域企業向け風力講演会

2020年　地元産業界向け風力講演会の開催

風力メンテナンス産業に興味を持つ地域企業を対象として、風力産業の市場規模や企業が参入するにあたっての課題等について講演を実施。

事業実施者からのメッセージ

福島高専 電気電子システム工学科 教授　伊藤　淳

「復興知」事業の風力発電人材教育には初年度から携わり、学生たちと共に多くの学びと経験を重ねてきました。風力発電施設の見学やインターンシップに参加した学生は、風力の技術的な仕組みだけでなく、再生可能エネルギーが地域にもたらす価値や重要性について理解を深めたように感じています。私自身も、化石燃料に依存しないエネルギーとして注目される風力発電の現状や将来の展望について新たな知見を得ることができ、非常に有意義な取組みだと実感しています。今後も本事業が継続し、より広く展開されることを心から願っています。

福島高専 電気電子システム工学科 特命教授　鈴木 晴彦

2024年8月、㈱北拓北九州支店のトレーニングセンターで実施された「風力発電O&Mのための実機による体験型インターンシップ」に同行いたしました。プログラムはまさに実践そのもので、実機風車の上部にある“ナセル”へ登ってのメンテナンス実習がありましたが、参加した福島高専4年生8名全員が挑戦し、誰ひとり尻込みすることなく見事に完了していました。まさに、これからの「新エネルギー社会」を支える実践的技術者としての第一歩を踏み出した瞬間と感じました。この実践的な「復興知」の取組みを、連携を以て継続させたいと思います。

復興知第2期

2021年

2022年

2023年

2024年

2025年

超短時間雇用モデルの導入に向けた検討を開始

多様な人が地域に関わることができる新しい働き方の実現に向けて、いわき市における超短時間雇用モデルの導入検討を開始。



▲超短時間雇用の導入検討会

いわき七夕まつりでのストリートファニチャーの設置

地域に更なる賑わいと交流を生み出すことを目的として、いわき駅前の歩道等に段ボール型のストリートファニチャーを設置する実証事業を開始。



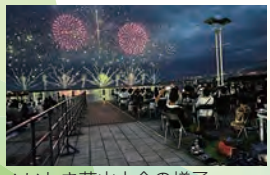
▲いわき七夕まつりの様子

東大先端研と復興庁が包括的連携協定を締結

「復興知」事業で培われた実践や知見が、国の復興施策と連動する段階へ。地域発の取組みが、より広い視点で位置づけられる。

いわき花火大会での人流計測の開始

地域イベントにおける混雑緩和策の提案に向け、イベント運営者等と連携し、いわき花火大会において、人流計測の実証事業を開始。



▲いわき花火大会の様子

東大先端研と福島高専が包括的連携協定を締結

再生可能エネルギー分野などを担う次世代人材育成を目的とした教育連携が始動。大学・高専・地域の新たな連携体制が構築される。

2026年～
To be continued...

5年間にわたる「復興知」事業の節目

人材育成・新しい働き方・交流人口の拡大の三本柱による取組みが一区切りを迎え、次のステージへ向けた基盤が形づくられる。



福島高専 電気電子システム工学科 准教授　橋本 慎也

私は、故郷であるいわきの地で、母校・福島高専の学生たちと共に本事業に関わる多くの活動に取り組んできました。地元の賑わいや将来を担う子どもたちの笑顔、そして高専生が生き生きと学び成長する姿を間近で見られたことは、私にとって何にも代えがたい至福の時間でした。今後も本事業のような意義ある取組みを継続し、地域にさらに貢献していきたいと強く考えています。このパンフレットをお読みいただいた皆さまのもとにも、私たちのグループがお伺いするかもしれません。その際は、ぜひ気軽に声をかけてくださいね！

東大先端研 産学官連携コーディネーター　雅楽川（うたがわ） 昂

(2024年4月～いわき市役所より派遣)

先端研への派遣に先立ち、私は経済産業省 福島復興推進グループに派遣され、そこで初めて被災地の現実と真正面から向き合うこととなりました。原発事故から15年が経った今でも、浜通りの一部地域では帰還率が低迷しており、復興は道半ばです。この状況を前に、地域の誇りを取り戻し、未来を切り拓くためには、新たな産業の力が不可欠であり、その中でも風力産業は国の政策とも合致し、次世代へ希望をつなぐ重要な役割を担うものだと感じています。

「子どもたちの未来のために福島に新たな風を起こす」―この思いが、私がこの事業に取り組む原動力となっています。



←「復興知」事業の詳しい取組みはコチラ

東大先端研
Research Center for Advanced Science and Technology The University of Tokyo

東京大学先端科学技術研究センター
飯田研究室

〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1

発行日：2026年2月

独立行政法人国立高等専門学校機構
福島工業高等専門学校
National Institute of Technology (KOSEN), Fukushima College

〒970-8034 福島県いわき市平上荒川字長尾30